日常業務から見つける Clinical question

―市中病院における後ろ向き研究の経験―

◎草次 裕人 [1)]
公立陶生病院 臨床検査部 [1)]

【はじめに】

大学等で研究職として働く人々に限らず、市中病院等の現場で働く我々も technician としての要素だけではなく、scientist としての一面を備え、医学の発展に寄与することが求められるようになってきています。しかし“研究”という言葉が初学者のハードルを上げており、当検査室においても、研究を自ら計画・実施できるスタッフは限られ、初学者を新たに“研究”の道に導くのは容易ではないと感じています。最新の機器を用いて検査をすることや希少な疾患を報告することに限らず、小さな疑問の解決や運用の改善等も歴とした研究であり、検査部は宝の山と称される様に、研究対象となるデータが多く存在します。日常業務において、“上司・先輩から聞いたから”や“昔からこの運用だから”とそれ以上考えることを止めてしまってはいないでしょうか。本講演のコンセプトは“考える”ことです。

初学者を対象とした本企画ですが、本講演が生理機能検査領域の若手技師や初学者だけではなく、より多くの方が“研究”について再考するきっかけとなれば幸いです。

【これまでの経歴】

当院は愛知県瀬戸市に位置し、瀬戸・尾張旭・長久手の 3 市により運営される公立病院です。当検査室は検体検査室（一般検査・血液/凝固検査・輸血検査・生化学/免疫検査）・生理機能検査室・検査情報室（細菌検査室）の 3 部門に分かれています。私は大学院の修士前期課程を修了後に入職し、各部門を 2 年ずつ経験し、入職 7 年目の現在は検体検査室で勤務しています。学術活動としては、5 年目に血液/凝固分野の学会発表を経験し、それ以降毎年、微生物分野・生理機能検査分野での研究・発表に取り組んできました。

本講演では、市中病院で私が計画・実施した後ろ向き研究の経験から、研究計画の第一歩である“研究テーマの決め方”についてお伝えします。

【Clinical question から始める研究】

研究計画における個人情報の取り扱いや研究倫理についてはガイドライン等が存在し、研究者はそれを遵守する必要があります。その一方で、研究テーマの決め方については、ひとつの正解があるわけではありません。この研究テーマの着想段階こそオリジナリティを発揮するポイントであり、“旅行は計画している時が一番楽しい”と喩えられるように、研究も研究計画をデザインしている時が心躍る瞬間のひとつと感じるのは私だけではないと思います。

そこで今回、初学者がこれから研究を始めるきっかけとして、私がおすすめしたいのが“Clinical question（CQ）を日常的に意識する”ことです。CQ とは日常業務における素朴な疑問のことで、“研究の種”とも呼ばれます。成書や学会発表・論文等を参考に CQ を解決する中で、自身の勉強不足で解決できるものなのか、サイエンスとして根拠に乏しいものや未解決の課題なのかを判別し、研究計画へと昇華させることができます。CQ は誰しもが抱いたことのあるものですが、technician としてルーチン業務を遂行するだけでは、知らぬ間に研究の機会を逃しているかもしれません。

研究の種類は多種多様ですが、症例報告も含めた全ての研究から得られる知見や経験の積み重ねが医学をより確かなものにしています。したがって、我々はエビデンスレベルに囚われる必要はなく、最終的に“患者さんの利益”となるような明確な目的を持って取り組むことが重要であると考えます。加えて、文献等から得られる知見についても、常に“批判的に吟味する”ように習慣づけることで、多様な視点でより多くの課題を見つけることができます。

“人間は考える葦”であり、我々は Biomedical Laboratory Scientist として“考える”ことのできる臨床検査技師であるべきであり、私はそうありたいと考えます。

公立陶生病院 臨床検査部 0561-82-5101（内線 4110）